



Title	未来共創 12号 編集後記
Author(s)	磯島, 浩貴
Citation	未来共創. 2025, 12, p. 273-273
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102530
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『未来共創』第12号を刊行いたします。本号では、査読論文3本、特集3本(特集論文1本、研究会報告2本)、研究ノート1本、報告4本、書評1本が掲載されます。執筆者や編集委員の方々、査読・校閲の労をとって下さった先生方、外部校正を請け負って下さったレカボラ編集舎の小野寺佑紀さん、本号に関わって下さった全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

個人的な話ですが、昨年半ばからご縁があり、本誌の編集作業に関わらせていただきました。業務に取り組むなかで徐々に気がついたのは、原稿を投稿する側と投稿される側との間にある意識の違い(?)ともいいくべきものでした。

私が(とはいっても私だけではないと思いますが)原稿を投稿する側の時は、何であれ「掲載可」のひと言が欲しい、次いで修正箇所の指摘が少なければ少ないほど嬉しい、という程度の意識でした。ただ、これは片面の理解でしかなかったといまなら言えます。というのも、このたび原稿を投稿される側に立ってみると、第一に意識すべきことは、いかに投稿された原稿の質を向上させて『未来共創』自体の水準を高く保つか、ということだったからです。ここには相当な意識の違いがあります。

さて、意識の違いがあるとして、実際にどう動いたか。まずは編集委員長を中心とした委員会で考えを共有した上で、限られた時間、人員、ノウハウを利用して、投稿者に「修正案」たる査読・校閲結果を返し、修正してもらう。文字通り「良くなるまで」この作業を繰り返す。こう書けば本当に何気なく、物事が機械的に進むかのように見えます。ただ、実情は決してそうではなく、この「良くなるまで」の意識の共有、そしてその実現に向けて投稿者も編集委員(及び査読者)も有形無形の試行錯誤を繰り返すことで進んでいきました。この「良くなるまで」という誰かに決められたり言い出されたわけでもないのに、共有されている意識によって学術誌の水準というものは維持されます。本号の編集に参加することで、なぜ研究教育機関としての大学が学術誌を維持すべきなのか、ということの一端を少し理解できた気がします。

また4月になると本ジャーナルも新しく動き始めます。関わる人も変わり、共生や共創に関するテーマも時宜にかなうものへと変わるのでしょう。それでもなお、「良くなるまで」の意識と共に『未来共創』も未来共創センターも続いていきます。本誌関係者のみなさま、及び読者のみなさま、来年度も『未来共創』をどうかよろしくお願いします。

2025年3月6日
『未来共創』編集委員会事務局長
附属未来共創センター 特任研究員
磯島 浩貴

発行 2025年3月31日
大阪大学人間科学研究科附属未来共創センター
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-2

編集協力
レカボラ編集舎 小野寺佑紀
デザイン 有限会社ブックポケット